

五年ほど前の事である。私は母の介護のため、娘を連れて満員のバスで実家に向かっていた。娘は八か月。退屈なのか、慣れない移動のせいかわかんない、大声で泣き始めた。母の介護と娘の育児、所謂ダブルケアの真っ只中にいた私は、毎日とにかく疲れていた。ぐずる娘をあやす気力も無く、ただ身体だけを小さく丸めて周囲の視線から逃れていた。

その時、突然明るい声が降ってきた。「ごめんねえ、飴ちゃんしか持ってないの。まだ食べられないよねえ。でも見てごらん、牛さんの絵が描いてあるのよ。可愛いでしょ。」

顔を上げると、前の席の女性がニコニコ微笑みながら、私の手のひらにミルク味の飴を乗せてくれていた。包み紙の牛のイラストも、私にっこり笑っている。娘は、カサカサという音に惹かれたのか、泣くのを止めて、私の手の中の飴に小さな手を一生懸命伸ばしていた。

突然の出来事に、私は何が何だかわからなかった。飴？泣き止んでる？お礼、伝えたい？気が付くと娘は、イラストの牛と同じように笑っていた。周りの人たちも、良かったね、可愛いねと、微笑んでいた。手のひらのミルク飴は温かく、強張っていた私の身体から力が抜けた。その頃は、介護も、育児も、できるの

は私しかいないのだから「ちゃんと」しなければいけない、迷惑をかけてはいけない、と自分に言い聞かせていた。頑張れば頑張るほど、責任感という呪文が、私の心を凍らせていった。硬くなった心は、やがて多くのものを撥ねつけるようになった。夫の優しさも、義母の気遣いも、娘の表情も見えなくなっていった。身体の自由が利かない母の悲しみを想像する力すら失くしていた。私だけが苦しい。私だけが辛い。私だけが。

一粒の飴が、それは大きな勘違いだと教えてくれた。私の周りには、思いやりや、優しさがたくさんあった。独りではなかった。硬くなった心が、溶けた瞬間だった。

ある日、ミルク味の飴も持て余すほど小さかった娘の手も、今では竹馬を支えるまでに成長した。ここに至るまで、私も、娘も、いったいどれだけの優しさや、思いやりを受け取ってきたのだろう。独りでは決して、ここまで歩めなかった。家族や、仲間や、社会の温かな繋がりの中で、私たちは育ち、生きている。

育児も、介護も、孤独に陥りやすい。独りになる辛さを、私は知っている。そして実は見えなくなっているだけで、多くの繋がりの中に居ることも、私は知っている。

大丈夫。誰も、独りじゃない。

あの日受け取った、思いやりのミルク飴のバトン。次は、私が誰かに渡す番だ。